

堤中納言物語『はなだの女御』の象徴世界

米田新子

はじめに

堤中納言物語「はなだの女御」は、藤原顕光・延子父子の鎮魂を目的の一つとして執筆されたのではないかということ、物語中の草花を基にした比喩と、作中人物のモデルとの関係に着目しつつ、先に述べた⁽¹⁾。その際、問題となる延子及びその同母姉の元子、そして顕光の権力掌握の前の大きな壁となつて立ちふさがつた、藤原道長の娘である彰子・妍子のみを特にとりあげて考察したため、物語全体における草花とモデルの女性たちとの対応の妙については、詳しく触れる余裕がなかつた。そこで、本稿ではこの問題に的を絞り、叙述してみたい。

—
はじめに、作品「はなだの女御」の中に登場する女房たちの会話

の最初にでてくる女院・内親王・后など、その当時の最高の身分の女性たちに関する記述をみてみよう。

まず、命婦の君によつて、「女院」が「はちすの花」に喩えられている。以下の引用は、ひととおり花の喩えを終わつた女たちが、再度歌に託して語りはじめる場面である。

命婦の君は「はちすのわたりも、この御かたちも、「この御方」など、いづれまさりて思ひきこえはべらむ。にくき枝おはせじかし。

はちす葉の心ひろさの思ひにはいづれとわかず露ばかりにも」⁽²⁾ 「はなだの女御」

こうした叙述から、「女院」像として、他の女性たちの上位に位置し、おそらくは帝寵争いを外から公平に眺める立場にある女性の姿が思い浮べられる。この「女院」のモデルは、藤原詮子（兼家女）である⁽³⁾。彼女は史上初の女院で、長保三年（二〇〇二）に四十歳で崩御

するまで、一条天皇の母后として多大な権力を握っていた。「はなだの女御」において、彼女が他の女性たちよりも一段上にいるように取り扱われているのは、このような状況と関係があるのだろうか。「栄花物語」には次のような記述がある。

内わたり今めかしうなりぬ。女院、「誰なりともただ御子の出で

〔き〕給はん方をこそは思ひきこえぬ」と宣はす。

〔栄花物語〕巻第四みはてぬゆめ⁽⁴⁾

「内わたり今めかしうなりぬ」とは、藤原元子・義子が入内し寵を競うことよつて、華やかになつた一条帝の後宮を描写したことばである。詮子は、その有様を公平に眺めていた（実際はどうだったのかよくはわからないが、少なくとも「栄花物語」ではこう記述されている）。こうした彼女の姿が、「はなだの女御」の当該箇所投影されているのであろう。また、「はちすの花」の比喩の選択には、出家の身であることが影響しているのではないだろうか。

次に、大君が「一品の宮」を「下草の龍胆」に喩えている。

大君「下草の龍胆は、さすがなんめり。一品の宮と聞こえむ、

〔はなだの女御〕

この「下草の龍胆」という喩えは、諸注釈書に指摘があるように、「枕草子」や「源氏物語」等の表現に代表される、平安時代の人々のこの草花に対する認識を根底にして記されたものであろう。

・龍膽は、枝ぎしなどもむつかしけれど、こと花どものみな霜枯

れたるに、いとほなやかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。
〔枕草子〕第六十七段⁽⁵⁾

・草むらの虫のみぞよりどころなげに鳴き弱りて、枯れたる草の下より龍胆のわれ独りのみ心長うはひ出でて
〔源氏物語〕夕霧卷⁽⁶⁾

これらは、秋の果てに他の草花が枯れてしまった中で、「龍胆」のみが華やかに生えている情景を叙している。「龍胆」は、他のものが滅びてしまつても、おのれひとり命長く存在しているといったイメージを持っていると言えよう。この「龍胆」の「一品の宮」のモデルは、村上天皇の女九の宮資子内親王である。彼女は円融天皇や選子内親王と同腹の兄弟であり、母は藤原師輔女安子である。「栄花物語」には、

内には、一つ御腹（の）女九の宮、先帝いみじう思ひきこえ給へりしを、この今の上もいみじう思ひかはしきこえさせ給て、

一品になし奉り給へり。内のいとさうざうしきに、をかしくて

おはします。

〔栄花物語〕巻第一月の宴

とあり、彼女が、父村上天皇に鍾愛され、同胞である円融天皇と仲睦まじかったことがわかる。資子は美しい人であり、宮中の寂しげなさまに彩りを添えていたらしいこともうかがえる。彼女は天曆九年（九五五）に誕生し、寛和二年（九八六）正月に落飾した。その生涯は長く、薨去は長和四年（一〇一五）四月、六十一歳であった。

以上示した、彼女の宮廷における位置および長命であるという属性が、「龍胆」のイメージとよく対応していると言えるだろう。

続いて、中の君が「だいわうの宮」を「ぎぼうし」に喩えている。中の君「ぎぼうしは、だいわうの宮にもどか」、

〔はなだの女御〕

「はなだの女御」の時代よりはるかに降るとは言え、「鏡頭屋本節用集」には、

草一 秋法師。

とあり、この名前の植物の存在が確認できる。しかしながら、私は、平安文学の中で、この「ぎぼうし」の用例を探しえていない。このことから、「ぎぼうし」は、平安時代において文学の世界とは隔たつたところに位置していた植物であつたと言えるだろう。ただし、植物名にこだわらなければ、「ぎぼうし」という言葉は以下の意味も持っている。

Qiboxi. キボウシ (生法師)

Catachino aragenai foxi. (貌の荒げない法師)

俗人の顔つき、または、様子をしている僧侶。

Guiboxi. ギボウシ (擬宝珠)

橋などの欄干に端の飾りとして付けてある木製か真鍮製かの球頭。
〔邦訳日葡辞書〕

「悦目抄」には、

りやうぜんに花をたむくるきぼうしの経よむ声はたふとかりけり
(7)

とある。この場合の「きぼうし」は、一首の意から、「日葡辞書」に意味項目として出ている「生法師」であろうと考えられる。さらに、「りやうぜん(靈山)」との関連から「擬宝珠」のイメージをも内包していると言えよう。ところで、「だいわうの宮」のモデルは藤原遵子(頼忠女)である。彼女は、天元元年(九七八)入内し、円融天皇の女御となつた。同五年(九八二)中宮、正暦元年(九九〇)皇后宮となり、長徳三年(九九七)に出家して、長保二年(一〇〇〇)皇太后宮となつた。この遵子に関する「大鏡」の記述をみてみよう。

故中務卿代明親王御女のはらに、御女二人・男子一人おはしまして、大ひめ君は、円融院の御時の女御にて、天元五年三月十一日に后にたち給、中宮と申き、御年廿六。みこおはせず。四条の宮とぞ申めりし。いみじき有心者・有識にぞいはれ給し。

功德も御いのりも、如法にをこなはせ給し。毎年の季御説経なども、常のこと・もおぼしめしたらさず、四日がほど、廿人の僧を、房のかざりめでたくてかしづきすゑさせ給ひ、ゆあむし、時などかぎりなく如法に供養させ給ひ、御前よりもとりわきさるべきものどもいださせ給。御みづからも、きよき御ぞたまつり、かぎりなくよまほらせ給て、僧にたぶものどもは、先御前にとりすゑさせてをかせ給てのちにつかはしける。恵心

の僧都の、頭陀行せられけるおりに、京中こぞりていみじき御時をまうけつ、まいりしに、このみやには、うるはしくかねの御器どもうたせ給へりしかば、「かくてあまりみぐるし」とて、僧都は乞食とゞめ給てき。

〔大鏡〕第二卷頼忠伝⁽⁸⁾

こうした道子の仏道修行への熱心さが書きとめられた記事は、他の作品にも散見する。よって、道子を仏教の熱烈な信奉者とみる意識が、当時の人々のあいだでは一般的であつたと言えるだろう。このような道子の人柄を考えると、「ぎぼうし」という比喩は、その詳しい内実は用例がほとんどないことからわからないものの、「生法師」や「擬宝珠」と音が通じることから、仏教に関係するということとで道子とつながっていくものと思われる。道子の仏道への熱心さが「ぎぼうし」という喩えに託されているのであろう。

ついで、三の君が「皇后宮」を「紫苑」に喩えている。

三の君「紫苑の、はなやかなれば、皇后宮の御さまにもがな、
〔はなだの女御〕

植物としての「紫苑」に「はなやか」さを見た例を、私はいまだみいだしてはいない。しかしながら、色名の「紫苑」には以下のような用例が存在する。

・帷子一重をうち掛けて、紫苑色のはなやかなるに、女郎花の織物と見ゆる重なりて、袖口さし出でたり。

〔源氏物語〕東屋巻

・わぎと色色しき御衣などは奉らず、紫苑、吾木香などやうの、
ことに華やかならぬしも、
〔在明の別〕⁽¹⁰⁾

・しおん、われもかうのほそなが、いとすさまじかりぬべき色な
れど、
〔苔の衣〕⁽¹¹⁾

・うすきくねなる十五ばかりに、しをん色の御ぞ、萩がさねのこ
うちき、糸びぞめのからきぬなど、花やかなるあはひにき給へ
るは、
〔小夜衣〕⁽¹²⁾

〔源氏物語〕の例は、「紫苑」と「はなやか」さが結びついていて注目される。ところが、その次に掲げた「在明の別」「苔の衣」では、「華やかならぬしも」「いとすさまじかりぬべき色」とあり、最初にあげた「源氏物語」の用例とは正反対の評価が与えられている。「われもかう」は、

・同じ色のわれもかうの織物の重なりたるなども、人の着たらん
はすさまじかりぬべきを、
〔狭衣物語〕卷二⁽¹³⁾

・香染の御衣どもに、青きが、濃き薄き、われもかうの織物たて
まつりたる、いと、匂ひなく、すさまじき心地したるも、
〔狭衣物語〕卷三⁽¹⁴⁾

等の用例が示すように、もの寂しい地味な色であつたらしい。その「われもかう」と取り合せたので、「紫苑」について前掲の評価ができたのではないだろうか。最後に掲げた「小夜衣」では、「花やかなるあはひ」を構成する色目の一つとして「紫苑」が登場している。

以上の用例から、「はなだの女御」において「紫苑」に「はなやか」を託しているというのは、おおむね妥当であると言えるだろう。

この「はなやか」な「紫苑」に擬されている「皇后宮」のモデルが、藤原定子（道隆女）である。清少納言等が活躍した明るい定子後宮を「はなやか」な「紫苑」で表現したのである。

その次に、四の君によって「中宮」が「桔梗」に喩えられている。

「桔梗」に「無量義経」の「義経」が掛けてあり、諸注にも指摘があるように、モデルである藤原彰子の父道長の祈りがちな姿とこの比喩との関連が考えられる。詳しくは前稿において述べたので、ここでは省略したい。

二

今度は、前項で取り上げた人々に続いて登場する、女御クラスの女性たちについてみていこう。

まず、五の君が「四条の宮の女御」を「露草」に喩える。

五の君「四条の宮の女御」露草の露にうつろふ」とかや、明け暮れのたまはせしこそ、誠に見えしか、（「はなだの女御」）

この「四条の宮の女御」のモデルは、藤原禊子（頼忠二女）である。彼女は、永観二年（九八四）花山天皇の女御となったものの、その寵は薄く、しかも入内して僅か二年足らずで天皇出家という事態に直面することとなった。また、その三年後、頼りにしていた父頼忠

もこの世を去った。「古今和歌集」等の歌を参考としてあげつつ、諸注によって禊子の寵愛薄い様子と物語における比喩とを結びつける指摘がなされている。私も、おおむねそうした解釈に賛成である。ただし、物語の「露草」という比喩は、天皇出家後の禊子の辿った儂げな生をも包含するものであったのではないかということをつけ加えておきたい。

ついで、六の君が「承香殿」を「撫子」に、七の君が「弘徽殿」を「刈萱」に喩えている。「承香殿」は藤原元子（顕光女）を、「弘徽殿」は藤原義子（公季女）をそれぞれモデルとしており、どちらも一条天皇の女御であることに気づく。両者は物語の中において、ライバル同士のように記述されている。

六の君、はやりかなる声にて、「撫子を常夏におはしますと言ふこそうれしけれ。

常夏に思ひしげしとみな人は言ふなでしこと人は知らなむ」とのたまへば、七の君「したり顔にも、

刈萱のなまめかしきの姿にはそのなでしこも劣るとぞ聞く」とのたまへば、みな人々も笑ふ。（「はなだの女御」）

これは、史実における二人の関係を反映した表現ではないかと考えられる。元子と義子とは、ほぼ近い時期に入内しており、その競いあうさまが「栄花物語」よりうかがえるからである。

さて廣幡の姫君参り給て、承香殿に住み給ふ。世のおぼえ、「い

でや、異しうはあらむ。あな古体」と聞ゆめれど、さしもあら
ずめやすくおぼしめしたり。かひある事なり。公季中納言、「な
どか劣らん」とおぼして、さし続き参らせ奉り給ふ。弘徽殿に
ぞ住み給ふ。これは何事にもいま一際は今めかしうさまさまに
し奉る事さらなり。ただ、「女御の御おぼえぞ、のどやかに見え
給へる。承香殿ぞ思はずにおはすめる」と、世の人申しためる。
内わたり今めかしうなりぬ。(中略)女御の御おぼえ、承香殿は
勝り給ふやうにて、はかなう月日も過ぎもてゆく。

(「采花物語」巻第四まではぬゆめ)

この記述によれば、天皇の寵愛は元子のほうが勝つていた。「はなだ
の女御」において、「承香殿」方のほうがその寵のあつさを自慢し、
「弘徽殿」方が「なまめかしさの姿」を「承香殿」に対抗するよう
に主張しているのは、こうしたことが背景にあるからであろう。ま
た、義子の「今めかし」というありさまが、「はなだの女御」の「な
まめかしさ」に通じているのではないだろうか。ところで、このよ
うに、「はなだの女御」では、「刈萱」に対して「なまめかし」とい
う属性が付与されている。「刈萱」に「なまめかし」さを見た例を、
私はこの時代の他の文学作品の中でいまだみだしてはいない。二つ
を組み合わせた「はなだの女御」の比喩の特異性について他の例を
も取り出しながら述べてみたいのだが、今は詳述する余裕がないので、
この点に関しては後日稿を改めて論じることとしたい。また、「承香

殿」の「撫子」の比喩は、皇后定子中宮彰子を別格の存在としてみ
ると、元子が一条天皇の女御たちの中で最も時めいていたことを反
映しているのであろう。

続いて、八の君・九の君・十の君が登場する。この三人が取り上
げて花の喻えをおこなう女性たちのモデルは、いずれも東宮居貞親
王(のちの三条天皇)の妃たちである。

・八の君「宣耀殿は、菊と聞えさせむ。宮の御おぼえなるべきな
めり」、「麗景殿は、花薄と見えたまふ御さまぞかし」九の君と
言へば、十の君「淑景舎は「朝顔の昨日の花」となげかせたま
ひしこそ、ことわりと見たてまつりしか」、(「はなだの女御」)
・「まろが菊の御方こそ、ともかくも人に言はれたまはね。

植糸しよりしげりましにし菊の花人におとらで咲きぬべき
かな」

とあれば、九の君「うらやましくも仰すなるかな。

秋の野のみだれてまねく花すすき思はむかたになびかざら
めや」

十の君「まろが御前こそ、あやしきことにて、くらされて。な
ど、いとほかなくて。

朝顔のとくしほみぬる花なれどあすも咲くはとたのまるる
かな」

とのたまふに、 (「はなだの女御」)

「宣耀殿」が藤原敏子（濟時女）、「麗景殿」が藤原綏子（兼家三女）、「淑景舎」が藤原原子（道隆二女）をそれぞれモデルとしている。

まず、「植ゑしよりしげりましにし菊の花」という比喩と敏子との関連について述べよう。すでに指摘されているように、この喩えは、彼女が居貞親王から非常に愛されていたことを示しているのである。加えて、「しげりましにし」という表現には、彼女が子室に恵まれていたことが反映していると考えている。次に、「花薄」の綏子に關してみよう。これもすでに、先行研究によつて、「みだれてまねく花すすき思はむかたになびかざらめや」に、源頼定との密通事件が暗示されているという指摘がなされている。「花薄」には、和歌の世界でよく秋風と關連して「まねく」「なびく」という属性が与えられているので、そういったことからも妥当な解釈であると思われる。ちなみに、居貞親王の綏子への愛情は淡いものであつたらしい。最後に、「朝顔」と原子に關して述べよう。この比喩についても、原子と關連づけた解が諸注によつてなされている。一門が失脚したのち、失意のうちに吐血し急死した原子の姿を「朝顔」の儂さに見ているのである。私は、次に掲げた歌が示すような、「朝顔」の華やかさとその盛りのときの短さどが、時の権力者道隆の娘として華華しく入内したものの、幸せな日々も束の間にして、悲しみに沈んだまま亡くなった原子の生涯を象徴しているのではないかと、このことを、付け加えておきたい。

権花やかなる、人にやるとて

五六 今のまの朝がほをみよかかれどもただこの花はよの中ぞかし
（和泉式部統集）¹⁵

今度は、これらの後にでてくる五節の君のおこなう比喩に關してみよう。

五節の君「御匣殿は、野辺の秋萩とも聞えつべかんめり」、

（はなだの女御）

この「御匣殿」のモデルは、藤原尊子（道兼女）である。「野辺の秋萩」という比喩は、「拾遺和歌集」の

題しらず

よみ人しらず

三五 しめゆはぬのべの秋はぎ風ふけばとふしかくふし物をこそ
思へ
（拾遺和歌集）卷第十三恋三

を下敷きにした表現であろう。「のべの秋はぎ」が風に吹かれて靡き伏すさまに、恋の物思いに耽る状態を託している。尊子は一条天皇のもとへ入内したものの、並み居る妃たちの中では寵愛薄い存在であった。¹⁶ おそらく、そのために思い煩うことも多かったであろう。そうした尊子のありさまが、「野辺の秋萩」という比喩に反映していると考えられる。

以上、帝や東宮の妃について、その比喩の考察を試みた。

さらに、大臣の子女・齋院齋宮・親王妃についてみてみよう。

まず、東の御方が「淑景舎の御おととの三の君」を「萱草」に喩えている。

東の御方「淑景舎の御おととの三の君、あやまりたることはなけれど、萱草にぞ似させたまへる」、
 （「はなだの女御」）

「萱草」の部分は、ほとんどの本が「大さう」となっていて、「くわさう」となっているのは神宮本・刈谷二冊本のみである。したがって、この二つのうちのどちらの本文をとるかということが問題になる。これについて、松尾聰氏は次のように述べている。⁽¹⁷⁾

朝鮮叢の異名「大さう」は、「たいそう」とよむらしいから、もし「たいさう」なら「おほざう（大ざつば）」にかけたとみるのは困難になりそうである。「くわさう」の本文は善本とおぼしき神宮本がそうなっているから、後人の意改本文ともみがたく、信ずるに足るかも知れない。従つてしばらく「くわざう」の本文をとりたい。

私も、この意見に賛成である。したがって、本文を「萱草」と定めて以下考察をおこないたい。「萱草」は、「忘草」の別名である。「忘草」は、その名の通り「忘れる」ということを象徴する草花として登場する。

寛平御時御屏風に歌かかせ給ひける時、よみてかきける
 そせい法し

六三 忘草なにかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり

（「古今和歌集」巻第十五恋歌五）

よって、「萱草」に喩えられた「淑景舎の御おととの三の君」は、人を忘れやすい女性（薄情な女性）か、または人から忘れられやすい女性かのどちらかだろうと推測がつく。この「淑景舎の御おととの三の君」のモデルは、先にとりあげた定子や原子の妹（道隆三女）である。彼女は、敦道親王と結婚したものの、親王からの愛情が薄かったことが「大鏡」の記述からうかがえる。

まことにや、御心ばへなどのいとおちゐらずおはしければ、かつは宮もうとみきこえさせたまへりけるとかや。（中略）二位の新発の御ながれにて、この御ぞうは、女もみなざえのおはしたるなり。母上は高内侍ぞかし。
 （「大鏡」第四巻道隆臣）

二人の仲は、あまり長くは続かず、長徳の変ののちには離婚状態にあつたらしい。⁽¹⁸⁾ こうした、彼女の親王から忘れ去られた様子が、「忘草」の別名である「萱草」に象徴されているのであろう。また、「枕草子」では、「萱草」が唐風の場所に似合う草花として記されている。

つとめて、見れば、屋のさまいとひらにみじかく、瓦ぶきにて、唐めき、さまことなり。（中略）前栽に萱草といふ草を、ませ結ひていとおほく植ゑたりける。花のきはやかにふきなりて咲き

たる、むべむべしき所の前栽にはいとよし。

〔枕草子〕一六一段

漢字好きであった彼女には、その点でも適切な比喩であったのでは
ないだろうか。

次に、この「三の君」の妹の「四の君」が登場する。

いとこの君ぞ「その御おととの四の君は、くさのかうと、いざ

聞えむ」、〔はなだの女御〕

まず、「くさのかう」の属性について検討しよう。

① 式部卿宮の前栽あはせに

草のかう

六 草のかういろかはりぬるしらつゆはこころおきてもおもふ

べきかな 〔伊勢集〕。〔古今和歌六帖〕にも載る

② くさの香

一三 白露のいかにそむればくさのかうおくたびごとにいるのま

すらん 〔元真集〕

③ くさのかう 左衛門君

九 とこなつにつゆうちはらふよひごと草のかうつる我がた

もとかな

みなもとのためのり

一〇 のべごとに花をしつめばくさくさのかうつるそでぞつゆけ

かりける 〔規子内親王前栽歌合〕

①からは、「草のかう」が「しらつゆ」によって変色するものである

ことがわかる。もっとも、一首の中では「しらつゆ」の方が「いろ

かはりぬる」という状態になったものかとも解することができる

けれども、この歌が詞書から知られるように、前栽合のときの詠であ

ることを考えあわせると、草花の方を主にして詠み込むはずである

から、こう解釈して問題ないと思う。こうした「くさのかう」の性

質は、②の歌をみると一層明らかになる。また、②では変色に対し

て「いろのますらん」とし、プラス評価を与えている。③は、「くさ

のかう」を物名的に詠み込んだ例である。どちらも、草の香が移る

という意の部分に「くさのかう」が用いられている。したがって、

「くさのかう」からは、香が移るという連想も働きやすいと言える

のではないかと思われる。さて、こうした性質を有する「くさのか

う」に喩えられている「その御おととの四の君」のモデルが、藤原

道隆四女である。彼女は、姉の定子皇后亡き後、生前の定子の望み

通り、敦康親王の母親代わりとなった。

故関白殿の四の御方は、御匣殿とこそは聞ゆるを、この一の宮

の御事を故宮よろづに聞えつけさせ給ひしかば、ただこの宮の

御母代によろづ後見きこえさせ給ふとて、上なども繋う渡らせ

給ふに、おのづからほの見奉りなどさせ給ける程に、その程

をいかがありけん、睦じげにおはしますなどいふ事、おのづか

ら漏り聞えぬ。(中略)上もいとあはれにおぼしめしたるべ

し。御匣殿もよろづ峯の朝霧に、又かく思ほし歎かるべし。

〔栄花物語〕巻第八はつはな

帝は、自然と、四の君を見かける機会が多くなって、いつしか彼女を愛するようになる。そのため、四の君は一条天皇の御子を身籠った。

かくてあり渡る程に、かの御匣殿はただにもあらずおはして、

〔栄花物語〕巻第八はつはな

そして、彼女は不運にも、苦しみぬいた末、年若い身で亡くなる。

俄に御心地重りて、五六日ありてうせ給ひぬ。御年十七八ばかりにやおはしましつらん。〔栄花物語〕巻第八はつはな

四の君の生涯をこうして辿ってみると、先に③で掲げた「とこなつの」の歌との関連性を指摘できるように思う。もう一度、この歌を分析してみよう。上の句の「とこなつのつゆうちちはらふよひごと」からは、一人寝の恠しい床で涙がちに夜を過ごす人物が想起される。¹⁹モデルに引きつけて考えると、そこに、定子没後、亡き定子思慕に沈んでいる天皇自身を重ねあわせることができるだろう。²⁰そして、下の句「草のかうつる我がたもとかな」からは、四の君へ一条天皇の愛情が移っていく状態を連想できないだろうか。つまり、私は、「くさのかう」という比喻には「とこなつの」の歌が大きく関わっているのではないかと考えているのである。「とこなつの」の歌の世界に四の君と一条天皇の恋愛を重ねて、「はなだの女御」作者は「く

さのかう」の喩えを用いたのであろう。また、先に指摘した、露がおくことよって変色するという「くさのかう」の性質は、四の君が天皇の愛情を受けることによってすぐに妊娠し亡くなったことと対応させることができる。露が貴人の愛情・情けを意味することがあるからである。このように「くさのかう」の性質を関連づけて考えることにより、この比喻に託した「はなだの女御」作者の意図が少しは明らかになったのではないかと思う。

続いて、「右大臣殿の中の君」と「左大臣殿の姫君」という大臣の子女が花の喩えの中に登場する。モデルとなったのは、藤原顕光二女の延子と藤原道長二女の妍子である。これについては以前に論じたので、ここではその結論のみを記すこととする。延子は「女郎花」に喩えられ、この物語の中で最も賞揚されている。一方、妍子は「われもかうに劣らじ顔にぞおはします」と評され、植物名「われもかう」に「我も此う」が掛けられてその勝気さが強調されている。「われもかう」は地味な草花であり、それに派手好きなことで有名であった妍子が擬されていることから、なにか皮肉なものを感じられる。両者に対する「はなだの女御」作者の態度の違いは明らかで、そこに作品執筆の一契機をみるることができるように思う。

次に、「齋院」「齋宮」が、それぞれ「五葉」「軒端の山菅」に喩えられている。「齋院」のモデルは選子内親王（村上帝第十皇女）で、彼女は五代の天皇に仕えた「齋院」であった。「五葉」に「五代」の

意がこめられているとみる指摘がある。「齋宮」のモデルは、恭子女王（式部卿為平親女王）である。まず、「山菅」を素材とした歌をみてみよう。

（題しらず）

（よみ人しらず）

六〇 あしひきの山の山すげやまずのみ見ねばこひしききみにも

あるかな

〔拾遺和歌集〕卷第十三恋三

（としへていふ）

二五七 やますげのみだれこひのみせさせついはぬいもかもとし

はへつつも

〔古今和歌六帖〕第五雜思

前者は、相手をひたすらに恋慕うところを詠んでおり、「やます」を引き出す序詞の「あしひきの山の山すげ」の中に「山すげ」がでてくる。後者もまた、狂おしい程の恋心を表現した歌であり、「みだれこひ」を導くものとして「やますげ」がでてくる。したがって、「山菅」は、激しい恋心をイメージさせることばであると言えるのではないだろうか。「はなだの女御」では、「山菅」に「軒端の」が加えられている。この「軒端の山菅」という表現を、私はいまだみいだしていない。しかしながら、「軒端の」については、「はなだの女御」が成立したと考えられる時代より少し降るものの、以下に掲げた用法があり、注目される。

題しらず

説人しらず

二四 尋ぬべき人は軒ばの古郷にそれかとかをるにはのたちばな

〔新古今和歌集〕卷第三夏歌

「軒ば」に「退き」を掛けている。「はなだの女御」の「軒端の」にも「退き」が掛けられているとすると、「軒端の山菅」に、激しい恋の世界から退いている人を象徴させているとみることができているのではないだろうか。そう解すると、「齋宮」の喩えとして非常に似付かわしい気がする。

最後に、親王妃が二人、比喩の中に登場する。まず、「帥の宮の上」。

まことや、まろが見たてまつる帥の宮の上をば、芭蕉葉と聞え

む」、

〔はなだの女御〕

この人物のモデルは、藤原濟時二女である。彼女は、敦道親王と結婚したものの、年月がたつにつれて親王の愛情が薄くなっていき、有名な和泉式部の一件もあって、小一条の祖母北の方の許へ帰った。姉の妹子とは正反対の心細い状態であったようだ。晩年の彼女の経済的に不如意だったようすが、「大鏡」に記されている。

いま一所の女君こそは、いとはなはだしく心うき御有さまにておはすめれ。父大将のとらせ給へりける處分の領所、あふみに有けるを、人にとられければ、すべきやうなくて、かばかりになりぬれば、もの、はづかしさ。しられずやおもはれけん、よる、かちより、御堂にまいりて、うれへ申給しはとよ。

〔大鏡〕第二卷師尹伝

父洛時の遺産分けの領地を人にとられ、恥も外聞もなく、夜徒歩のみずから道長の許へ、祈るような気持ちで嘆願に赴いた彼女の姿が、印象的に描かれている。「芭蕉葉」は、仏教思想において人身の儚さを喩えるものとしてある。そうした仏典の世界を拠り所として、次の西行の歌が成立したのであろう。

二三六かぜふけばあだにやれ行くばせをばのあればと身をもたの

むべきかは 〔山家集〕。〔西行法師家集〕にも載る

秋風が吹くことによつてぼろぼろに破れていく「芭蕉葉」。それは、濟時二女の零落していった、世の無常を体現した生を象徴したものとと言えるだろう。

次に、「中務の宮の上」をみてみよう。

よめの君「中務の宮の上をば、招く尾花と聞えむ」など聞えおはさうずるほどに、
〔はなだの女御〕

このモデルは、為平卿女である。

六条の中務の宮と聞えさするは、故村上の先帝の御七の宮におはします、麗景殿の女御の御腹の宮なり、北の方はやがて村上の四の宮為平の式部卿の宮の御中姫君なり、母上は故源帥のおどの御女の腹なり。
〔茶花物語〕 卷第八はつはな

ただし、この記事以上の彼女についての情報を、私は得ていない。したがって、比喩の妥当性という点に関しては保留にしておきたい。

おわりに

以上、「はなだの女御」において展開される花の喩えとモデルとの対応の妙について、分析をおこなった。選択された草花は、人物を象徴するために、非常に有効に機能しているということが、多少なりとも明らかになったのではないかと思う。

比喩の場面では、草花による象徴世界が見事に構築されている。

その際、夏から秋にかけての頃に物語の季節を設定したことが、この象徴世界をより精巧にしたのではないかと思われる。秋へと季節が推移することによって、「秋風」が吹き「露」が置くという自然現象が現われる。象徴世界の中において、それは、人から「飽き」られることやそのための「涙」を意味する。それぞれの人物に選ばれた植物をみてみよう。一で分析した女院・内親王・后クラスの女性たちに対して用いられた植物は、この「秋風」や「露」の自然現象に代表される秋という季節の影響を、まともに受けない草花たちである。つまり、「秋風」が吹いたり「露」がおりたりすることによって、植物そのものの状態が変化したりしない。それは、モデルの女性たちの安定した地位と照応しているように思われる。また、彼女たちは、女院の「はちすの花」を除いて、すべてみな漢語を使った花名で記されている。彼女たちの重々しい身分とそれに付随するいかめしさを、作者は漢語を用いることによって表現しようとしたの

ではないだろうか。二で取り扱った女御クラスの女性たちや三で扱った大臣の子女・親王紀（齋院齋宮は同レベルでは捉えられないだろう）になると、季節の影響を良くも悪くもものに受ける植物たちが配されている。和歌世界において、「秋風」や「露」とともに詠まれ、あるイメージ世界をかたちづくっている植物たちが、多く登場するのである。たとえ、「秋風」や「露」が今は背後に生じていない状態であっても、本格的な秋の季節が到来したときには、ありさまが一変するだろうことを予想させる。これは、モデルとなった女性たちの不安定な立場とよく対応していると言えよう。

そして、こうしたことは、例えば「女郎花の御方」が暑さを強調した以下の場面に、端的に表れているように思う。

女郎花の御方「いたく暑くこそあれ」とて、扇を使ふ。

「いかにとて参りなむ。恋しくこそおはしませ。

みな人もあかぬにほひを女郎花よそにていとどなげかるる

かな」

〔はなだの女御〕

今を盛りとする「女郎花」には、まだ冷たい「秋（飽き）風」が吹いていないのであった。

〔注〕

(1) 拙稿「堤中納言物語」はなだの女御」の執筆意図——モデル探求及び草花による比喩の検討を通して——（『国文学攷』

第一三四号、一九九二年六月。以下、本文の中で「拙稿」前稿」と記すものは、すべてこの論文のことである。

(2) 小学館日本古典文学全集より引用。以下、「はなだの女御」の引用は同書に拠る。

(3) モデル設定に関しては、(1)で示した拙稿に私見を提示した。

(4) 栄花物語全注釈より引用。以下、「栄花物語」の引用は同書に拠る。

(5) 岩波日本古典文学大系より引用。以下、「枕草子」の引用は同書に拠る。

(6) 小学館日本古典文学全集より引用。以下、「源氏物語」の引用は同書に拠る。

(7) 日本歌学大系より引用。

(8) 岩波日本古典文学大系より引用。以下、「大鏡」の引用は同書に拠る。

(9) 「今昔物語集」その他に、逸話が語られている。

(10) 大槻修氏「在明の別の研究」（一九六九年、桜楓社）より引用。

(11) 鎌倉時代物語集成より引用。

(12) 鎌倉時代物語集成より引用。

(13) 岩波日本古典文学大系より引用。以下、「狭衣物語」の引用は同書に拠る。

(14) 史実では、義子のあとに元子が入内している。事実とは反す

る記述であつても、二人が張り合つていたことを当時の人々が認識していた例となるのではないかと考えたので、引用した。

〔源氏物語〕 帚木卷

—— 広島大学大学院博士課程後期在学 ——

(15) 新編国歌大観より引用。以下、和歌の引用は同書に拠る。

(16) 当時、一条天皇の後宮には、定子・彰子・元子・義子がおり、后である定子・彰子は別格として、女御の中では、元子が寵愛されていたらしい。したがつて、寵薄かつたであろう尊子のありさまというのは、おおよそ想像がつく。

(17) 松尾聰氏「堤中納言物語全釈」(一九七一年、笠間書院)

(18) 藤原道隆三女の伝記については、小松登美氏「藤原道隆三の君と敦道親王」(『平安文学研究』第六〇輯、一九七八年一月)に詳しい。

(19) うち払ふ袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけり

〔源氏物語〕 帚木卷)

君なくて塵積りぬるとこなつの露うち払ひいく夜寝ぬらむ

〔源氏物語〕 葵卷)

(20) もちろん当時は、寵愛する中宮彰子がいたので、一条天皇は完全に寂しい毎日を送っていたとは考えられない。しかし、愛する定子を亡くしたという側面に立つてみれば、佗しい日々を過ごしていたと言えるのではないだろうか。

(21) 山がつの垣ほ荒るともをりをりにはあはれはかけよ撫子の露